

# 卒業・修了者（修士課程・博士課程前期）の就職状況

厚生課

## 進路状況

平成と年号が改まって最初の学部卒業生2,395名及び大学院修了者（修士）569名が3月25日、広島大学を巣だって行った。例年のごとく、この内70%弱の者が就職し、各々社会人としての生活を切開いていっていることであろう。

最近の就職状況についてであるが、下表にもあるとおり昭和59年度と昭和63年度の2か年を記載してあるので、本文と併せ比較対照し参考にさせていただきたい。

さて、「いざなぎ景気」以来の好況が続いている今の日本経済の中で、業績好調な民間企業等の拡大・異業種への進出による、史上最高の求人のあった昨年にも増して、平成元

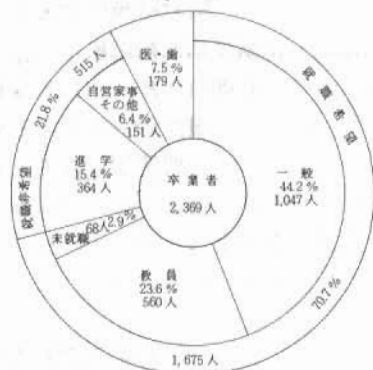
年度における就職活動は空前の「売り手市場」となっている。

しかし、半面業績好調な民間企業等の大幅な求人増とは対象に、児童・生徒の減少による、教員採用枠の減少といった現象もみられ、今回のテーマである就職状況は日本の社会・経済に係わる問題を顕著に写しだしているといえよう。

こうした現象を踏まえ、来年度以降の就職への取組みについては、学生へのガイダンスの実施等体制の整備を含めた検討が必要ではないかと考えている。

また、広島大学における大学院の整備に伴い、大学院進学者が年々増加しているのももう一つの傾向である。

学部



大学院

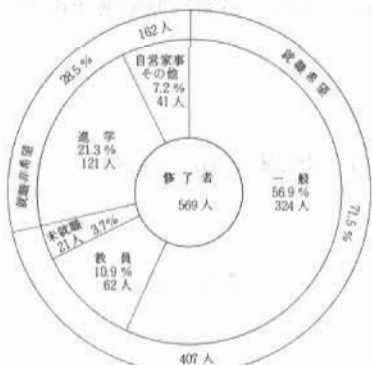


昭和63年度

学部



大学院



**産業別就職状況**

卒業生の産業別就職者数からいえば、教職関係への就職が最も多いが、前頁で記述したように児童・生徒の減少により、漸減傾向にある。これに対して、第三次産業であるサービス業（特に情報処理関係）や金融・保険業が増加傾向にある。

また、企業内での異業種進出・拡大もあり、理系学部生の非製造業への進出も見受けられる。今後とも、これら産業別就職者と出身学部との相関はうすくなっていくものと思われる。

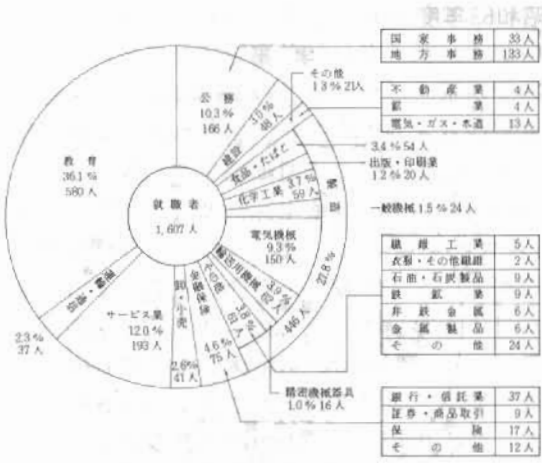
る。特に、情報関係（システム・エンジニア、プログラマー等）においての求人状況は、学部の指定は皆無に近い状態にある。

最近、就職情報でよく見聞する3Kによる製造業離れの現象は、本学において数字を見るかぎり、マスコミ等でいわれているような顕著な傾向は見出せない。

（ちなみに、3Kとは「きつい」「危険」「汚い」をいい、場合によっては「暗い」「臭い」を意味することもあり、企業イメージを表現する言葉として使われている。）

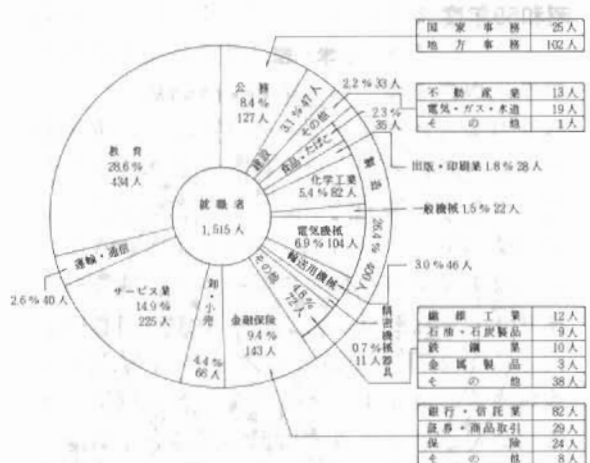
**昭和59年度**

学部

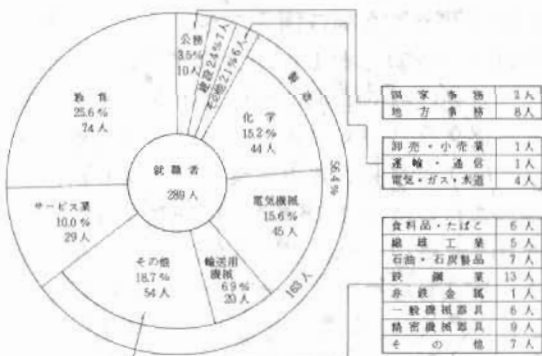


**昭和63年度**

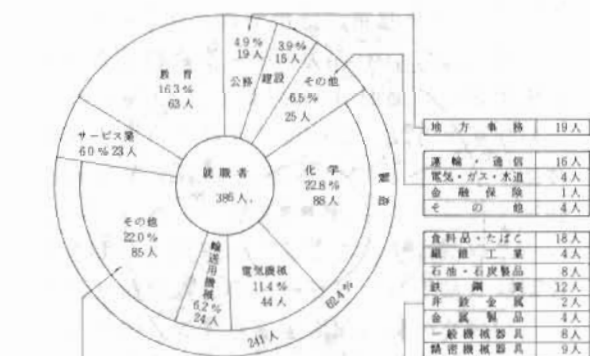
学部



大学院



大学院



### 都道府県別就職状況

下のグラフの数字は民間企業等及び教職への就職者を合わせたものであり、学部卒業生については、全体では地元広島へ就職する比率が最も高いが、年々漸減傾向にあり、広島の減少分が東京の増加となっている。特に、民間企業等への就職者だけを見ると、例年広島と東京の就職者数は非常に拮抗した状態にあったが、昭和63年度では東京が広島を上まわり、今後とも東京上位の状態は続いていくものと思われる。

大学院については、特に東京・大阪へ集中する傾向が見られ、その分地元広島への就職者数は漸減傾向が続いている。これは、民間

企業等における本社の東京集中化によるものと思われる。

その他、それ以外の地域についてはあまり変動は見出せない。

また、採用枠の減少とはいいながら教職に就く者の数が、かなりの府県でみうけられ、その数が民間企業等への就職者数を上回る県も多く、教職における「西の広島高師」の底力を見せている。特に、西日本においては全府県にわたり就職している。

さらに、昭和62年度以降の受験機会複数化による入学者の出身都道府県の分布状況が、平成3年3月卒業以降の就職状況にどのような影響を与えるか注目しているところである。

昭和59年度



昭和63年度

